長塚氏は、晩年まで時々旅行をつづけられた。病氣になられてからも處々旅せられた。「見られるだけ見て」といふのは長塚氏の心境であつた。

次に、長塚氏は明治四十四年十一月に、岡田博士から喉頭結核といふ診斷を受け、根岸養生院、神尾氏の金澤病院、橋田氏の橋田内科醫院、京都帝國大學醫科大學附屬醫院等の診療を受け、又しばしば福岡の久保猪之吉博士の診療を受けつつ、つひに九州大學病院に入院して大正四年二月八日逝去せられた。行年三十七歳であつた。くはしき事は、長塚節全集第三卷所載の年譜にて知ることが出來る。

この重大な疾病に罹られたことが、長塚氏一代の作歌に一紀元を作つたと謂つていいとおもふ。長塚氏は明治四十一年、四十二年、四十三年ごろは、寫生文・小說の方に心が集注し、その方が歌よりもおもしろく感ぜられたので、作歌が少く、明治四十四年の如きは、「乘鞍岳を憶ふ」十四首のみであつた。それも正岡子規先生十周忌記念號だといふので無理に作つてもらつたほどであつた。然るに明治四十四年の冬に病氣になられて、入院生活をするやうになつて、作歌が復活し、その歌が從前とやや異り、病氣に對する驚き、老母に對する心痛、少女に對する親しみ等の、現實相に沁入つた深刻な歌が出來たのである。

生きも死にも天のまにまにと平らけく思ひたりしは常の時なりき
我が命惜しと悲しといはまくを恥ぢて思ひしはみな昔なり
往きかひのしげき街の人みなを冬木のごともさびしらに見つ
我がこころ萎えてあれや街ゆく人のひとりも病めりともなし
知らなくてありなむものを一夜ゆゑ心はいまは昨日にも似ず
かくのみに心はいたく思へれや目さめて見れば汗あえにけり
しかといはば母嘆かむと思ひつつただにいひやりぬ母に知るべく
なにしかも命悲しといはまくに答ふることは我は知らぬに
な憂ひそと人はいへどもまたけくてあらばかあらむ我愁ひざれや
人は我ははかなきものかひたすらに悲しといふもわがためにのみ

かういふ一聯の歌であつた。いつもの冷靜な取りみださない長塚氏の歌としては、鋭く强い歌のみである。併し字句を飽くまで練つて、粗雜にならない歌風は長塚氏生涯の風格で、萬葉調であるから、發表當時の一般の人々には分かり易くなかつた歌であるが、皆心をしづめて骨折つて味ふべき歌ばかりである。そしてさういふ歌の間に、自然の草花などに心を寄せてしみじみと歌

つた歌のあるのも、師の子規の系統と長塚氏本來の面目が出てゐるのである。『ゆくりなく拗切りてみつる蠶豆の青臭くして懷かしきかも』『日に干せば日向臭しと母のいひし衾はうれし柔かにして』『杉の葉の梅の木にして懸れるを見つつ佇むそのさゆらぐを』の如き、哀韻のかぎりなきもののみである。

それから長塚氏は前にも云つた如く、處々の病院で療治を受け、そのついでに旅をして、古畫、佛像、釣鐘などを見て歩かれた。そして絶えず知友にハガキで通信をしてゐたけれども、大正二年には全く歌は發表してゐない。左千夫翁が病歿されても挽歌一つ無かつた。これは親友であるだけ挽歌が出來にくいといふこともあるが、追悼の文章だけで、歌はなかつた。そして左千夫翁の歿後故人と親交のあつた人々が無一塵庵に寄つたとき、中村不折畫伯が、長塚氏のカリカチュールを描かれ、『宣告の期限が過ぎて飯を食ひ』と題されたりした。宣告といふのは、喉頭結核と診斷されれば先づ一ヶ年は保たないと宣告されたのをいふのである。然るに左千夫翁は突如として逝かれ、長塚氏が殘つたのをいふのである。

大正三年から大正四年にかけて長塚氏は、「鍼の如く」といふ大作を二百三十一首發表した。大正三年に、赤彦君も既に上京され、長塚氏は橋田内科醫院に入院中のことである。百穂、赤彦、千樫、憲吉、茂吉等は代る代る長塚氏を訪問したものである。併し、當時私等の歌風は亂調子に

動いてゐた時であり、長塚氏も變な氣持でアララギの歌風を見て居られた時であつたから、進んでアララギ新傾向のことなどにも話が餘り觸れなかつたのであるが、長塚氏はある日ふと歌の話をなし、『僕の今の歌に對する考は先づかういふものかも知れない』といつて、『白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり』といふ歌を示されたのであつた。それが機緣となつて、二百餘首の大作を發表するやうに至つたが、此は長塚氏一代の傑作となつた。また此の「鍼のごとく」の內容はいろいろ複雜して居り、病中吟がその主調を占めて居るが必ずしもさうでなく、心靜かに歌といふ文藝の奧儀を見つめたやうな歌もあり、戀人に對した哀情もあり、故郷の風物の歌もあり、母をおもふ歌、友をおもふ歌、旅行吟等を交へてゐる。病中吟も前に揭げた、「病中雜詠」と稍趣を異にして、しづかな歌調の中に無限の悲哀を傳ふるものになつてゐる。よつて、この「鍼の如く」は、長塚氏の歌の完成期にあつた綜合作と謂ふことが出來る。

白埴の瓶こそよけれ霧ながら朝はつめたき水くみにけり
曳き入れて栗毛つなげどわかぬまで櫟林はいろづきにけり
おしなべて白膠木の木の實鹽ふけば土は凍りて霜ふりにけり
洗ひ米かわきて白きさ筵にひそかに櫻欄の花こぼれ居り

かういふ歌は、背景に病氣のことが潜んでゐるけれども、それを表立たしめないで、飽くまで天然を歌ひあげて居るのであるが、これも初期の、「寫生の歌」よりも餘韻の深きをおぼゆるのである。次に、病中吟を抄出しようとおもふが、これは長塚氏の素直な人生觀、歌に對する自然流露の說、氣品の說等をさながらに窺ひ知るに便利であるから、煩をいとはず少し餘計に抄出して見ようとおもふのである。

藥壜さがしもてれば行く春のしどろに草の花いけにけり
朝ごとに一つ二つと減り行くになにが殘らむ矢ぐるまの花
窓の外は蔓ばかりのわびしきに苦菜ほうけて春行かむとす
小夜ふけてあいろもわかず悶ゆれば明日は疲れてまた眠るらむ
やはらかきくくり枕の蕎麥殼も耳にはきしむ身じろぐたびに
ゆくりなく手もておもてを掩へればあな煩はし我が手なれども
すこやかにありける人は心强し病みつつあれば我は泣きけり
小夜ふけて厠に立てばものうげに蛙は遠し水足りぬらむ

脫ぎすてて臀のあたりがふくだみしちぢみの單衣ひとり疊みぬ
夜もすがら訴へ泣く聲遠ぞきて明けづきぬらし雨衰へぬ
小夜ふけて竊かに蚊帳にさす月をねむれる人は皆知らざらむ
牛の乳をのみてほしたる壜ならで挿すものもなき撫子の花

長塚氏の病中吟は、かういふ境地にまで到達したのであつた。それから、長塚氏は一生獨身であつたが、結婚すべき候補者がほぼ定まつたころ、病氣の宣告も受けたので、とうとう實現されずにしまつた。然るにその少女は病身の長塚氏に同情されて、いろいろと慰めたことが長塚氏の歌に出てゐる。そして、『われ生れて三十三年はじめて婦人の情味を解したるをおぼえぬ』と云つた。そしていよいよ遠くに離れて九州に行つたとき、『小生は今三十四年にしてつくづく婦人に運なき生涯を嘆じ申候』とうつたへてゐる。「鍼の如く」の歌の中、『十三日、漸く折生迫にもどれば同人の手紙などとどきて居たるを一つ一つと披きみてはくりかへしつつ』といふ詞書があつて、二首の歌が書いてある。

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のおらぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとなさもあらばあれ少女のことは暫し語らず

長塚氏が歿して、遺品が屆き、小石川の小布施家で通夜をしたとき、古泉君が先づ行き、私が稍おくれて行つた。そしてこの少女の寫眞が長塚氏の手帳の中にしまつてあつたのを、歌の手帳や、歌集の原稿や、書入した赤光などと共に古泉君が預つて持つて歸つたから古泉君の遺品の中に殘つてゐる筈である。『四十雀なにさはいそぐここにある松が枝にはしばしだに居よ』『春雨にぬれてとどけば見すまじき手紙の糊もはげて居にけり』などは皆この少女に對する感慨を抒べたものである。

唐黍の花の梢にひとつづつ蜻蛉をとめて夕さりにけり
天霧らふ吹田茨木雨しぶき津の國遠く暮れにけるかも
霧島は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠ぞきにけり
播磨野は朝すがしき淺霧の松のうへなる白鷺の城
久方の天が下には言絶えて嘆きたふとび誰かあふがざらむ

此等の歌は、病氣になつてからの旅の歌として「鍼の如く」の中に散見するものである。旅行を好んだので、福岡に行つてからも旅せられた。九州の東南の方で、肺病患者だからと云つて宿るのに難儀されたことなどが當時のハガキ通信に載つてゐる。

長塚節氏の歌の發育史及びその構成の內容はなかなか複雜で一口にいふことが出來ないがざつと云つて見るならば、正岡子規の指導があつてこれが大體の骨子であつた。それから萬葉集がある。萬葉集の影響は全般的であるが東歌の調の影響などもあつた。それから記紀があつた。それから神樂催馬樂の影響なども他の同人に先んじて受けた。それから古畫の影響、彫刻建築鑄金等からも著しく影響を受けてゐる。それから「西洋」もあつた。この「西洋」は、子規・漱石の如き諸先達が「西洋」から受けた影響ほどまでには行かないが、さう尠くはないとおもふのである。晩年に東洋古美術のことをしきりに云々したけれども、コローやミレーのものなども常に心に持つてゐたものである。それから芭蕉蕪村子規等の俳諧がある。特に芭蕉の句、子規の晩年の句などは皆暗記してゐた。『君達にはまだ俳句に就いての理解が少いやうに見えます。恐らく君達には古來の名句といふ範圍に屬して居るものでも、つまらなく見えるのが多いだらうと思ひます』（全集第四卷、茂吉に與ふ）云々とある。

長塚氏は、芭蕉の、『月淸し遊行のもてる砂のうへ』といふ句を例にひいてよく話をしたことが

あつた。また、奥の細道の文章と挿入されてゐる俳句との密接なる關係融合についても話された。「鍼の如く」にある歌の詞書が、芭蕉のものなどからの悟入であることが極めて明かである。私の歌に、大正三年四年あたりから芭蕉俳諧の影響の見つかるのは、長塚氏を橋梁としてであつた。また長塚氏は、子規の、『雞頭の十四五本もありぬべし』といふ句を引合に出して話したものである。私等の歌が當時、いろいろ難儀してゐたころで、作る歌に難解なものが時々あつた。さういふものに對して、明快化、單純化を說いたものであつただらう。根岸派の歌は初期には虛子・碧梧桐兩氏なども交つて歌俳同體であつたが、後になるほど分化した。併し長塚氏などは芭蕉の眞髓を常に歌に取入れてゐたのである。

長塚氏は晩年に、短歌の、『氣品』『冴え』といふやうなことをいつた。それは、『白銀の鍼うつごときぎりぎりす』と歌つた、その『しろがねの鍼』のごとき心境を欲したのかも知れない。また晩年に私に與へた文章の中に、『今の評論界では只思想の方面ばかり論じて、品位といふ事を閑却してゐる。今の歌界には品位といふものが探してもない。これは赤光評の時に云はうと思つて居たが何時書けるか知れないから一寸書添へる。死んだ伊藤君は感情はすべて調子によつて表はされると云つてゐたが、其道理の解つてる人が殆どない樣だ。僕は千萬言の議論よりも一首を構成して居る言葉に彈力のあるかないかを見るのが第一と思ふ。だがそんな人は少ない。それゆゑどの歌もどの歌も皆弛緩して居る。皆ぼくの考へてゐる藝術とは緣の遠いものばかりだ』（全集第四卷）と云つた。また、『いつぞや時事新報に出た百人一首の中から、只一首選出した際の君の眼を僕は少なからず疑つた。僕は今世間を餘りにかけ離れて、高い藝術を求めて居るのだから、いふ事が君と一致しない場合が多いかも知れぬ。だから今の僕自身をば赤光の批評を書く折には告白したいと思つたのであつた。僕を滿足させる藝術が現はれて呉れればいいと願つて居る。僕は滿足するのではなく全身を捧げて尊敬したい。只そればかりだ。幾ら云つても出立するところは其處からだ。さうして歸著するところもそこだ。何もありやしない』（全集第四卷、茂吉に與ふ）。といふのがあるのを以て大體の考を知ることが出來る。また、伊藤左千夫作、『秋草のしげき思ひもいひがてにまつはる露を手に振り落す』の歌につき、『左千夫君には近來此の如きものあるを嘆ぜざる不能、しかも頑として他人の言に耳をかさず候。』と云つて居るのも長塚氏の標準を知る上の大切な參考となるのである。

長塚氏の歌は、大正四年一月發行のアララギ第八卷一號に載つたのが最後であつた。併しその頃は既にアララギが歌壇の有力な一雜誌になつてゐたから、長塚氏の「鍼の如く」は相當多くの人々に讀まれ、佐藤春夫氏の如きも嘆賞されたのであつた。そして、大正六年に「長塚節歌集」が春陽堂から發行されてからは益々人に讀まれるやうになつた。そして、同時にアララギの歌風

に常に新しい刺戟を與へたのみならず、一般歌壇にも實に大きな影響を與へてゐる。言葉を換へていへば、長塚氏の歌はアララギの歌風の建立に重大な役割を果したと共に、アララギ歌風を主潮流とした以來の本邦歌壇の建設にむかつて何時も指導的位置に立つてゐたと謂ふことが出來るのである。嘗て橋田東聲氏なども長塚氏を祖述して遊說し歩いたこともあり、尾山篤二郎氏も長塚氏の歌を評釋したこともある。その他の雜誌でも長塚氏を說いたことは稀ではない。

併し長塚氏は、孤獨、寂しさに堪へえた人であり、歌壇の黨領、親分などにならずとも濟んだ人であつたから、世間に謂ふ門人といふものがなかつた。卽ち、實質上の門人は誠に多いが世間的名義上の門人といふものがゐなかつた。

齋藤茂吉

後記

岩波文庫本「長塚節歌集」を編むことを志したのはもうだいぶ以前のことであるが、時間が無いのでなかなか實行が出來ず、やうやく今月になつて出來あがつたものである。

本書を編むに當つて、春陽堂本及びアルス本を使用したことに就き、編者は兩書店に深く感謝するものである。なほ、長塚氏の歌集原稿は長塚氏の遺骨が小石川の小布施家に著いたとき、その他の遺品と共に古泉千樫君に保管を賴んだのであるから古泉君の遺族のところにある筈であるが、このたび其を參考にすることが出來なかつたのは殘念である。

本書を編むにあたり、岡麓先生、土屋文明、柴生田稔、山口茂吉、佐藤佐太郎、堀內通孝の諸君から多大の助力を得たことを感謝する。特に、底本の誤植、脫漏等につき、それから傍訓の決定等につきいろいろの助言を得た。

解說は嘗てアララギ二十五周年記念號のために執筆したものであるが、このたび轉載して解說とした。

長塚氏の歌句或は詞書等の異同は大體は旣に本文に注し終つたのであるが、未定草稿として殺

見したものの如きは本文には注しなかつた。例へば、「鍼の如く」の草稿の如きは全集本の後ろに附けてあるけれども、あれは歌作の過程を示すのに好資料だといふ意味で、必ずしも出來あがつた歌句の異同を示すものでないからである。

ただここで一言して置くのは、新聞「いばらき」に載つた病中雜詠であるが、これはアララギに載つたあとに載せたものだから、是非記載しておく必要があるといふので故古泉千樫君が春陽堂本の卷末記に書いてゐるからそれを次に轉載しようとおもふ。

一、「病中雜詠」は初め「アララギ」に發表し、後新聞「いばらき」にまた發表せられた。このごろ橋詰氏から「いばらき」を送つて貰つて見ると、二八五頁の詞書は、

明治四十四年七八月の頃より唾を嚥めば咽喉にいささかの痛みを感じけるを、喉頭結核といふ恐ろしき病に罹り居けりとも知らざれば心にも止めざりしが、十一月の半に至りて漸く上京しけるに打ち棄ておかば餘命は僅に一年を保つに過ぎざるべしといへばさすがに心はいたく打ち亂れて

となつてゐる、それから二九四頁の「おほよそは心は嘗て」の歌の次に

いたづきは癒えなむのぞみありぬべしいためる心いゆる時あれや

の歌があり、同頁「山茶花のわびしき花よ」の歌の次に、

ま悲しき花は山茶花日にしてはいくたび見つる思ひかねては

の歌がある。これは後に發表せられたものだけに「いばらき」に據つた方がよいやうである。

なほ本書一五三頁の詞書中、「博士の手折られけるなり」「赤きを活けもておくられけるなり」のところは、從來は「手折りたるなり」「活けてもてきてくれたるなり」となつてゐたのを、今回全集第六卷所載、大正三年七月十八日附久保田俊彥宛の訂正申込の書簡によつて改めたものである。

なほ本書を讀まれた人々は、長塚節全集（春陽堂發行）六卷をも併せて讀まれむことを希望する。

昭和八年七月二十一日

齋藤茂吉識

第二刷後記

第一刷を賣盡したので、今回第二刷を發行するに際し、第一刷の誤植等を訂正して改めた。それを參考のため、次に纏めて書きとどめ置く。

第二刷

頁	行	誤	正
九	五	荒庭（あらには）	荒庭（あれには）
七九	三	何鹿（いくるか）	何鹿（いかるが）
九〇	五	白子（しらこ）	白子（しろこ）
九八	四	濱田	關田
一一一	四	いつ	いづ

頁	行	誤	正
一五〇	一	蜀	蜀（以下同所）
一六一	四	みしとも	みしことも
一八五	八	朝霧	淺霧
一九三	一	木草（かくさ）	木草（きくさ）
一九七	七	いつ	いづ

なほ、八一頁四行粟田は普通クンダと呼んでゐるさうだが、今大日本地名辭書に從つてクリタとしておいた。右、平木文郎氏、井田鑾子氏、土屋文明氏等の指摘を忝うした。

昭和八年八月五日　第一刷發行
昭和二十五年七月十日　第十五刷發行

長塚節歌集
定價六拾圓

選者　齋藤茂吉
發行者　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波雄二郎
印刷者　東京都西多摩郡霞村根ケ布三八五番地　山田一雄
發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

本製・印刷堂化大社會式株

納本

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の壟占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生產豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する藝術解放の所以なりや。吾人は天下の名士の鑒に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は絶をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亙つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供せんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此運に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫重版書

◇既刊一六四〇册

萬暦赤繪　志賀直哉作　120
小僧の神様他十篇　志賀直哉作　60
牛肉と馬鈴薯他三篇　國木田獨歩作　30
啄木歌集　石川啄木著　90
田舍教師　田山花袋著　60
河童　芥川龍之介著　30
若山牧水歌集　若山喜志子選　90
赤彦歌集　齋藤茂吉・久保田不二子選　60
青年　森鷗外作　60
文明論之概略　福澤諭吉著　60
ギリシア抒情詩選　呉茂一譯　80
人さまざま　テオフラストス著　吉田正通譯　30
デカメロン(一)　ボッカチオ作　野上素一譯　60
クリスマス・カロル　ディッケンス作　森田草平譯　60
怪談　ラフカディオ・ヘルン　平井呈一譯　60
人と超人　ショオ作　市川又彦譯　100
緋文字　ホーソン作　佐藤清譯　90
エドガー・アラン・ポウ　黑猫他六篇　森澤田卓爾譯　60
ハックルベリイ・フィンの冒險(上)(下)　マークトウェーン　中村爲治譯　90
四人の少女　第一部上下　オールコット作　壽岳しづ譯　各60
ファウスト　第一部　第二部　ゲーテ作　森林太郎譯　90 120
ハイルブロンの少女　ケートヒェン　クライスト作　手塚富雄譯　60
旅の日のモーツアルト　ゲーリラ作　石川錬次譯　30
感情教育(上)(下)　フロベール作　生島遼一譯　各60
未來のイヴ(上)(下)　リラダン作　渡邊一夫譯　60
陽氣なタルタラン　ドーデー作　小川泰一譯　60
月曜物語　ドーデー著　佐藤譯　90
ベラミ(上)(下)　モーパッサン作　杉捷夫譯　90 60
スペードの女王他一篇　プーシキン作　神西清譯　30
トルストイ日記抄　トルストイ著　除村吉太郎譯　60
藝術とはどういふものか　トルストイ著　河野與一譯　90
ランケ世界史概觀　ランケ著　鈴木成高・相原信作譯　90
學問のすゝめ　福澤諭吉著　60
福翁自傳　福澤諭吉著　120
省察　デカルト著　三木清譯　60
教養と無秩序　マシュー・アーノルド著　多田英次譯　90
シュライエルマッヘル宗教論　佐野勝也・石井次郎譯　90
ファラデー力と物質　ファラデー著　稲沼瑞穂譯　60
言語活動と生活　シャルル・バイイ著　小林英夫譯　90
權利のための鬪爭　イエーリンク著　日沖憲郎譯　30
フォイエルバッハ論　エンゲルス著　佐野文夫譯　30
近代民主政治(一)(二)(三)(四)　全四卷　ブライス著　松山武譯　各90
犯罪と刑罰　ベッカリーア著　風早八十二譯　60
デモクラシーの本質と價値　ハンス・ケルゼン著　西島芳二譯　60
經濟學及課稅之原理　リカアドオ著　小泉信三譯　120
君主論　マキアヴェルリ著　黑田正利譯　60

最新刊書

愚管抄	丸山二郎校註	120
新春	徳富蘆花作	60
紅樓夢 (八)(九)	曹雪芹作 松枝茂夫譯 各	60
死刑囚最後の日	ユーゴー作 豐島與志雄譯	60
ミシェル・オークレール	ヴィルドラック作 内藤濯譯	50
ゴロヴィリョフ家の人々 上 下	シチェードリン作 湯浅芳子譯 各	90
オランダ獨立史 上卷 下卷	シラー作 丸山武夫譯	110 90
ローマ史論 第三卷	マキアヴェルリ著 大岩誠譯	90
フレーベル自傳	長田新譯	60
善の研究	西田幾多郎著	60
甲陽軍鑑 (一)	古川哲史校訂	60
エンゲルスのカウツキーへの手紙	岡崎次郎譯	120
カール・マルクス 資本論 (三)	エンゲルス編 向坂逸郎譯	120

漆山本春雨物語	上田秋成著 漆山又四郎校訂	30
或る女 前篇	有島武郎作	60
卍(まんじ)	谷崎潤一郎作	60
彼女と彼	ジョルジュ・サンド 川崎竹一譯	90
農民 (下)	バルザック作 水野亮譯	90
感情教育 下	フロベール作 生島遼一譯	60
にんじん	ルナアル作 岸田國士譯	100
青い花	ノヴァーリス作 小牧健夫譯	60
七つの傳說	ケラー作 堀内明譯	60
デカブリストの妻	ネクラーソフ作 谷耕平譯	60
三人姉妹	チェーホフ作 湯浅芳子譯	30
形而上學敍說	ライプニッツ著 河野與一譯	120
どちりなきりしたん	海老澤有道校註	30
經濟學における諸定義	マルサス著 玉野井芳郎譯	60
第三階級とは何か	シエイエス著 大岩誠譯	60

岩波